【特集 伝えること／伝わること――多様な今、考える】

なぜ伝わらないのか、「言葉」から考える

インタビュー

川添 愛

［言語学者／作家］

脇坂敦史＝取材・執筆
古里麻衣＝撮影

「伝える」「伝わらない」というとき、私たちはまず「言葉」によるコミュニケーションを思い浮かべる。でもその言葉を私たちは深く理解し、正しく使っていると言えるのだろうか？ むしろ言葉こそが、日々の生活のなかで誤解や短絡化や分断といったさまざまな弊害を生んでいる元凶なのではないだろうか。「なぜ伝わらないの？」という、そんな人びとのため息に対し、言語のエキスパートなら何を語ってくれるだろう？ そして生成AIが語りはじめた饒舌な言葉を前にして、これから私たちはどう対処すべきなのだろう。言語学者・作家の川添愛氏から、特別な講義の贈り物をいただいた。

アメリカの構造主義言語学の代表的な学者であるチャールズ・ホケット（1916–2000）は、1960年代に人間の言語と他の動物のコミュニケーションを比較し、どう異なるかをまとめました。それ以外にも多くの学者が「言語とは何か？」について議論していますが、何が言語であって何がそうでないのかを決めるのはむずかしい問題です。ここでは「なぜ伝わらないのか？」を考えるうえで重要と思われるポイントに絞り、人間の言語がもつ特徴について考えてみましょう。

人間の言語には、音声言語だけでなく手話もあります。手紙やチャットのように、文字だけで意思を伝えることもできます。しかし、どれにも共通して言えるのは、「信号の組み合わせ」で成り立っていること、そしてそれらの信号の数には限りがあるということです。

音声でいうと、いわゆる日本語の「五十音」は二十数個の音素（母音や子音などの最小単位）を組み合わせたものです。文字について、日本語は2種類のかなと漢字を使っていて複雑そうに見えますが、それでも数は限られており、無限ではありません。英語をはじめとするヨーロッパの言語なら、アルファベットの大文字と小文字、記号などを合わせても、200を超えないでしょう。

言葉は有限の信号を使い、無限の組み合わせを生む

信号の数に限りがあるのは、やはり人間の記憶には限界があるからでしょう。仮に私の耳が細かい周波数の違いを無限に聞き分けることができたとしても、その違いをまともな言語として活用することはできません。限られたセットの信号に区切ることで効率よく言葉を記憶し、それを使うことができる。それは同時に、私たちが「見たもの、感じたもののすべてを完全に伝えきることはできない」ことも意味します。だから何かを捨てなければいけない。言葉は最初から、「一部しか伝えられないもの」である。それが重要なポイントだと思います。

「近代言語学の祖」とも呼ばれるフェルディナン・ド・ソシュール（1857–1913）が、言語を「差異（区別）のシステム」と捉えたことは有名です。たとえば色には無限のグラデーションがありますが、表す言葉は有限です。ですから、「緑」といった言葉は「色そのもの」を表現しているというよりも、「ここからここまでの色」とそれ以外を区別しており、そのなかには深い緑や明るい緑も含まれます。また日本語では「青」と「水色」を区別しますが、英語のblueはそれらの両方を含んだ範囲の色を表します。このように、言葉によって名づけられ、区別される対象の数も有限であり、文化の違いや分野の違いに応じて区別の細かさも変わってきます。

限られた音や文字（あるいは手話なら、身体の動き）しか使えないとはいえ、言語は無限の可能性をもっています。信号を組み合わせることで、今まで誰も言わなかったことも表現できます。作家の創作ほどではなくても、人は誰も経験したことのない、まったく新しい状況をいとも簡単に言葉にしています。単語レベルでも、日々いくつもの新語・造語が生まれている。それらの多くは、既存の言葉を組み合わせることでつくられています。

このように、音や文字、単語の数を制限して使いやすくすることは「言語の経済性」、そして組み合わせることで無限の可能性をもつことは「言語の生産性」とも呼ばれています。

言語がもつ経済性、つまり単純化しようとする性質により、私たちの発する言葉には曖昧さも生まれます。相手から誤解されるなど、「伝わらない」が生じる原因の多くが、ここにあると考えられます。同じ「青い」でも、話し手が想定している青さと、聞き手が想起する青さは完全には一致しないはずです。言葉の使い勝手のよさと、曖昧さは表裏一体なのです。

頭のなかの辞書は一人ひとり違う

今の時代は、言葉に対する期待や幻想が強すぎるかもしれません。「言葉を尽くせば、わかってもらえるはず」という期待は、いつのまにか「なぜ、わかってくれないの！」という失望に変わる。その結果として、対立が生まれることが多いと感じます。

しかし言語学者の立場から見れば、言葉というのは、そもそも正確には伝わらないもの。それは言語の「欠点」ではなく、基本的な性質です。限られた信号や語彙を使うからこそ、曖昧さも生じるけれど、無限の可能性をもっているのです。それが欠点と認識されてしまうのは、社会のなかで言葉だけによるコミュニケーションが増えすぎてしまったからかもしれません。

同じ日本語を使っているように見えても、それぞれが言葉を覚えた経緯は異なりますし、地域差や世代差の影響も無視できません。一人ひとりの頭のなかにある辞書は、ぜんぶ違うと思ったほうがよいでしょう。その違いを無視し、あるいは違いなどないと信じてコミュニケー

ションをとろうとすれば、どうなるか？　自分と違う言葉の使い方をしている人に対し、「それは間違いでは？」「そんな言葉遣いはおかしい」などと決めつければ、余計な対立を生んでしまいます。

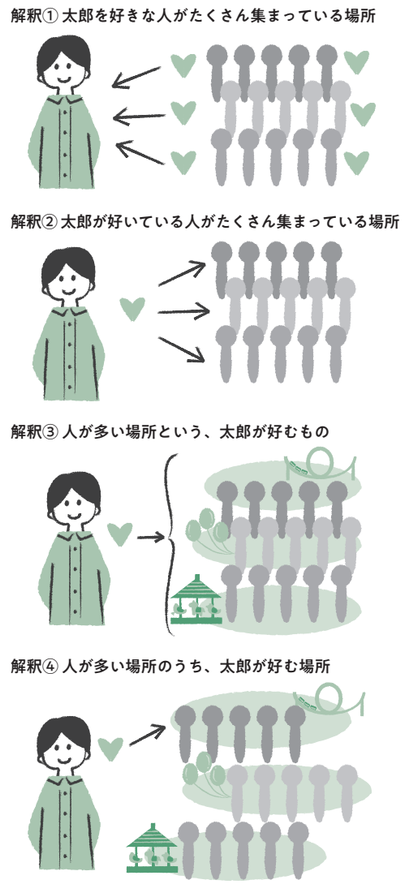
言葉の曖昧さは、「青い」の例で見た単語の意味レベルだけでなく、言葉の組み合わせ方によっても生じます。たとえば「白いギターのケース」という言葉を聞いて、何を思い浮かべますか？　ある人は白いのはギター本体だと解釈し、別の人は白いギターケースを思い浮かべる。もっとむずかしい例もあります。ぜひ、つぎの言葉に挑戦してみてください。

「太郎が好きな人が多い場所」

ふたつくらいの解釈は、すぐに思いつくかもしれません。しかし、実際は少なくとも4通りの解釈が可能です（図1参照）。

ふだんのコミュニケーションでこういった曖昧さに煩わされることはあまりないと思いますが、それは私たちが「ありえない解釈」や「今の文脈に必要ない解釈」を無意識に無視しているからです。私たちは相手の言葉を解釈するとき、無意識に複雑な計算をしているのです。

■図1：「太郎が好きな人が多い場所」4つの解釈



出典／川添愛『世にもあいまいなことばの秘密』（筑摩書房、2023年）より作成。イラスト／石山綾子

言葉が曖昧だからこそ、問違いや衝突も起きる

しかし、ふとした拍子に、相手が意図していないほうの解釈を選んでしまうことがあります。ウェブニュースの見出しで私が実際に間違えた例でいうと、「政府の女性を応援する政策」というのがありました。おそらく政府が「女性たち」を応援するためにまとめた政策というような意味だと思いますが、私は読んだ瞬間、「政府の女性＝女性政治家」を応援する政策と思ってしまいました。

これくらいなら、「空目」のようなものとして笑い話ですみますが、無視できない失敗につながることもあります。あるときメールのやり取りで日程調整をしていて、私は「2日、5日、8日の午後が空いています」と書きました。私は「どの日も午前中はダメ」というつもりでこう書いたのですが、相手から、「2日の午前中にお願いします」と返事がきて、びっくりしてしまいました。でも後から読み返すと、たしかに2日と5日は一日中OKという意味にもとれる、曖昧な文面でした。

SNS上の書き込みなどでも、書いている人の人となりがわからないせいで、誤解をすることがあります。

以前、インターネット上で議論の分かれていた署名運動について、リンクとともに記された「まだ署名やってるよ」という書き込みを見たことがありました。とっさに私はそれを、署名運動に反対するアンチによる悪口と解釈しました。「まだ（あんな馬鹿なことを）やってるよ」という呆れを表現していると思ったのです。ところが、その人のプロフィールを読むと、署名に賛成している人でした。その書き込みの意図は「まだやってるよ（だから署名してね）」という宣伝だったことがわかりました。

ちなみに、こんなふうに言語の曖昧さについて話をすると、「特に日本語は曖昧ですよね」と言う人もいますが、私はあまりそう思っていません。日本語と同じく、主語を省略できる言語は世界中にありますし、文の最後に述語や否定の表現がくるような言語は他にもあります。

よく知られていることですが、英語にも英語なりの曖昧さがあります。たとえばchangeという単語は「変える」という動詞でもあり、「変化」という名詞でもある。場合によってはどちらなのかわからなくなることもあります。

あるいは、つぎの文章をどう訳すべきでしょうか？

The chicken is ready to eat.

この文には、「この鶏肉は食べられる」という解釈と、「このニワトリは食事をする準備ができている」という解釈の両方があります。chickenに「鶏肉」と「ニワトリ」の意味があり、さらにeatの意味上の主語が「人間」なのか「ニワトリ」なのかが曖昧であることから、複数の解釈が生じます。

もっとも、日本人はあまりストレートにものを言わず、やんわりとしたコミュニケーションを好む、という面はあるかもしれない。でも日本語そのものが他の言語に比べて特別に曖昧であるかというと、決してそうではないと私は思っています。

生成AIが話す「機械の言葉」とは、どんなものか？

ここまで人間の言葉が必然的にもつ曖昧さを説明してきました。それなら機械の言葉はどうでしょうか？　人間の言葉を操る生成AIが普及しはじめ、私たち人間のコミュニケーションにも影響を与えはじめています。そもそも機械は、どのように言葉を「理解」しているのでしょう？

たとえば目の前のテーブルに一杯のコーヒーがあるとします。人間はそれを見て、「これはコーヒーだ」と言葉にすることができます。自分が生まれて初めてコーヒーという言葉、あるいはその意味を知ったときのことは、もう忘れているかもしれません。でもきっと親や誰か大人がその茶色い液体を指し「これはコーヒー。すごく苦いよ」などと教えてくれたのではないでしょうか。

それ以降も、ミルクや砂糖入りのコーヒーに出合ったり、似た色でも違う飲み物や液体があると知ったりしながら、コーヒーに対する理解が深まっていったと思います。

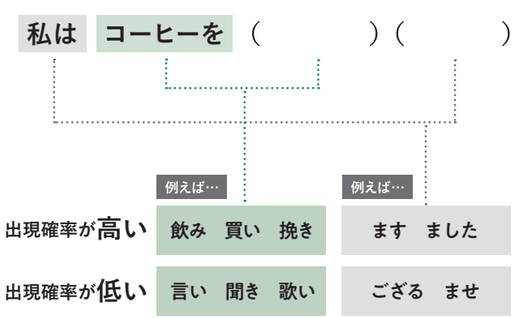
それに対し生成AIは、「コーヒー」という言葉をどう理解しているのでしょう？

生成AIの基盤となっている「言語モデル」は、人間が書いた言葉や文章をもとに、単語の出現確率をモデル化する技術です。「コーヒーを」のあとにはどんな単語が続く可能性が高いか？　やはり、「飲む」が圧倒的に多い。「挽く」や「買う」もある。「コーヒーを言う」はあまりない。「コーヒーを」に「牛乳」が続くことはあるかもしれないけど、「ステーキ」は少ないかも……。

このような「どんな単語の列のあとにどんな単語がきやすいか」を膨大な文章から学習したモデルを「大規模言語モデル」（図2）と言います。ChatGPTをはじめとする生成AIは、大規模言語モデルを利用してつくられています。最新のChatGPTの学習データ量は公表されていませんが、2020年の時点で発表されたGPT-3では、約5000億トークンの文章が学習に使われていました。1トークンは、英語では1単

■図2：大規模言語モデルのイメージ

文脈に応じて出現確率の高い単語を計算し、
自然な文章を生成する



語に近い単位で、5000億トークンというのはざっと計算しても、ひとりの人間が毎日24時間休むことなく読み続けても数千年はかかる量です。現在はそれよりもはるかに大きなデータが学習に使われていると言われています。

もちろん、これは人間が「コーヒー」という言葉を使えるようになるプロセスとはまったく違う。しかし、つくり方はひじょうに巧みです。言葉は、直前の単語だけでなく、もっと前の単語とも関係をもっています。たとえば「私はコーヒーを」なら「飲みます」と続くのが自然でも、「拙者がコーヒーを」なら「飲むでござる」と続くかもしれない、といった具合に。さらに言えば、そこは喫茶店なのか、コーヒー農場なのか、といった文脈の情報も、あとにどんな単語が続くかに影響を与えます。人間が書いた膨大な文章と、大規模で複雑な計算を可能にする環境がそろったことで、あたかもそこに「コーヒーを飲んだ経験をもつ誰か」がいるかのような錯覚をしてしまうほど巧妙に言葉を出力できる機械が生まれたのです。

生成AIとの対話が増えることへの懸念

生成AIの利用は急激に増え、生成AIとの会話が当たり前の時代になりました。今読んでいる文章を人間が書いたのか生成AIが書いたのか判断できないこともあります。そうした状況への評価は人それぞれですが、言語学者として私は、懸念を抱かざるをえません。

最近の報告では、中高年層は生成AIをウェブ検索の延長として使う傾向にあるのに対し、若い世代では「おしゃべりの相手」として接することが多いそうです。愚痴を聞いてもらったり、人生相談をしたりとか。生成AIは相手の言うことを否定しないし、それが心地よいという人も多いです。でも、そうした会話が多くなりすぎると、ある種のエコーチェンバー効果[＊1]が起きて自分の信念が強まりすぎたり、他人との対話が苦痛になったり、もとからあった抑鬱の傾向が強まったりするという現象も報告されはじめています。

もちろん生成AIの影響については短期間で結論をだすことはむずかしく、現時点では十分に信頼できるデータや研究があるわけでもありません。ただ生成AIを自分が使ってみた実感から言っても、使いすぎることで人間同士のコミュニケーションから遠ざかる人びとが一定数でてきても不思議はないと思います。

とりわけ心配なのが、「AIネイティブ」とも呼べるような、小さな子どもへの影響です。言語学者の川原繁人（かわはらしげと）さん、折田奈甫（おりたなほ）さん、桃生（ものう）朋子（ともこ）さんは今年発表した共著論文のなかで、幼児向けの生成AI搭載おしゃべりアプリの危険性や問題点を指摘しました[＊2]。忙しい親のかわりに、生成AIが子どもと対話することで言語の発達にも役立つアプリをつくろうという開発者の試みに対し、人間と機械の言語獲得の違いなども踏まえながら、好影響だけではなく悪影響の可能性が大きいことを懸念しています。

私も、子ども向けの生成AIの活用は慎重に行うべきと思っています。言葉を使うというのは、やはり基本的に人と人とのあいだで、しかも失敗しながら行うものだと思っているからです。傷つき、傷つけもしながら、「こういうことを言ったら、人は怒るんだな」という風に感情とも密接に結びついた形で習得していくものです。他人とともに自分の言葉を育てていく。そういう機会が減ることを懸念しています。

伝える／伝わる関係を築くために、わかり合うために必要なこと

インターネット上の文字言語によるコミュニケーションが増え、しかも生成AIという新しい要素まで加わった今の世界、言葉の使い方はむずかしいと感じる人が増えているかもしれません。しかし、話し言葉であろうと書き言葉であろうと、そもそも互いへの敬意がなければ、わかり合うことはできません。立場があまりにも違い、「相手は敵で、間違ったことしか言わない」と決めつけているような場合、何を言っても伝わらないものです。相手が優しい意図をもって言った言葉さえ、「何か裏があるのだろう」と勘繰ってしまいます。

そんなとき、どうやってわかり合うか？　さまざまな学問分野の研究や議論もありますが、まずは「少しでも信頼関係を構築すること」が大切と考えます。そして、あくまでも個人としての相手に向き合う。考えや立場は違うけれど、この人のこの部分は理解できるとか、そういう小さなところから糸口を見つけるしかないと思います。

人間は、ひとりでは生きていけない。動物としてはとても弱い存在です。それが言葉を使い、他者と協力することで文明を築いてきた。自分のために協力してもらう、できれば味方になってもらうことが生き延びるのに必要だったわけです。現代社会でも、言葉の使い方ひとつで幸せに生きられるかどうかが大きく変わってくると思うのです。

言葉の先にいるのは、ひとりの個人である。もちろん、それが重要だとわかっていても、ついレッテルを貼ってしまうことはあります。多くの色をまとめて「青」と呼ぶのが経済的であるのと同様、個人よりも属性といった「大きなくくり」で語ったほうがわかりやすいように思えてしまう。いわゆる「主語が大きい文」は、人間のそういう特性からでてきます。

実際よりも物事を単純化して捉えてしまう傾向は、私たちの状況認識にも影響を与えています。たとえば誰かがコーヒーをこぼすのを見て、「あの人はドジだなあ」と思ったり、そのまま口にだしてしまったりすることはあるでしょう。しかし現実に起こったのは、「あの人がコーヒーをこぼした」ということだけです。それだけを根拠に「あの人」に「ドジ」というレッテルを貼ってしまうのも、一種の単純化です。親が子どもに注意するとき、「また」とか「いつも」などと言ってしまい、つい広げてしまいがちなのも少し似ていますね。

無免許運転で誰かを傷つけないために

最近、歌人・俵万智さんが、川原繁人さんとの対談で語った言葉にはっとしました。今は言葉だけのコミュニケーションが安易に行われており、「みんな無免許で好き放題に乗り回している印象があります。だから言葉の暴力や行き違い、事故が多発する」というのです[＊3]。言葉に免許制度はなく、無免許が基本です。でも、交通事故のように言葉が人を殺してしまうこともある。言葉には、ちゃんと守るべきルールやマナーもあり、安全運転のスキルも必要。その言葉のセンスに「さすが、俵さん！」と思ってしまいました。

言語学者としても、言葉についてのより深い認識が、もう少し広まればいいなと思っています。言葉はすべてを正確に伝えるようなものではない。他人の頭には、自分とは違う辞書が存在しているかもしれない。だから相手はこの言葉を、どんな風に感じるだろう？　もしかしたら、こう解釈しないだろうか？　そういうことを考えながら言葉を使う必要がある。そして、やはり人と人とのコミュニケーションを、しっかり確保してほしい。

でも改めて考えると、昔はコミュニティのなかで、こう言えば絶対に伝わる、と思い込んでいるような環境がほとんどでした。最近はSNSでの対立が話題となり、言葉の使い方がうまくいかない事例を目にする機会も多いので、言葉には曖昧さがあり、自分と他人では言葉の使い方が違うことに気づく人も増えてきたのかもしれません。それは、「自分対世界」という形で発信をする機会が増えてきたからでしょう。かつては記者やライター、作家などをのぞき、世界に向けて自分の言葉を発信したり、リテラシーを意識したりして言葉を使う機会は少なかった。今は多くの人が、世界中にさまざまな人がいることを想像しながら言葉を使う時代になってきているのだと思います。

注

＊1　SNS上で自分と似た興味関心をもつユーザーをフォローした結果、自分と同じ意見や似た価値観・情報ばかりが行き交う状況を、閉じた小部屋で音が反響する物理現象（エコーチェンバー）にたとえたもの。

＊2　川原繁人、折田奈甫、桃生朋子『子ども向け生成AI搭載おしゃべりアプリの危険性について：言語学的・心理学的・認知科学的観点から』（2025年）https://user.keio.ac.jp/~kawahara/pdf/KawaharaEtAl_Kiyo2025_GenerativeAI.pdf

＊3　川原繁人『日本語の秘密』（講談社、2024年）51頁

川添愛（かわぞえ・あい）
言語学者、作家。1973年、長崎県生まれ。九州大学文学部卒業、同大大学院に博士号取得。2008年、津田塾大学女性研究者支援センター特任准教授、12年から16年まで国立情報学研究所社会共有知研究センター特任准教授。専門は言語学、自然言語処理。著書に『白と黒のとびら』『自動人形の城』『言語学バーリ・トゥード』（東京大学出版会）、『働きたくないイタチと言葉がわかるロボット』（朝日出版社）、『コンピュータ、どうやってつくったんですか？』（東京書籍）、『ふだん使いの言語学』（新潮選書）など。